

重い十字架  
「新たなかいのち」への希望⑥

一五九七年二月五日、長崎の西坂で外国人宣教師、日本人信徒あわせて二十六人が十字架にかけられ、殉教した。一六二七年、二十六人は福者とされ、一八六二年には教皇ピオ九世によつて列聖された(聖人とは、カトリック教会で殉教者や特に信仰と徳にすぐれた信徒に贈られる称号で、教皇から列聖される。福者は聖人に準ずると認められた信徒の称号で、福者を経て聖人とされる)。今年は日本二十六聖人。

日本のキリスト教弾圧はこの二十六人の処刑を発端に明治の初めまで続き、殉教者は二万人を超える。二十六聖人列聖百五十年を機に改めてフランシスコ・サビエルが伝えたイエスへの愛、大勢の殉教者たちによってキリストの信仰と教會には若者が少なくなく、

人殉教者が列聖されてちょうど百五十年にあたる。日本カトリック司教協議会はそれを記念し、殉教の様子が描かれた葉書大のカードを日本全国の信徒に配つた。日本にキリスト教が伝えられて今年で四百六十三年。当時と違い、今は信仰の自由が保障されているにもかかわらず、価値観の変化という重い十字架を背負い、取り巻く状況は厳しいと言わざるを得ない。修道者になる人は激減、聖職者の減少、高齢化が目立ち、修道院の縮小・閉鎖なども耳にする。聖職者だけの問題ではなく、洗礼を受けける人も多くなく、

老宣教師が私に「日

本の文部省に負けた」と苦笑しながら今をそう表現された。確かに子供は学校の勉強、クラブ活動、塾、習いごとに追われ、信仰などに関心は向いていない。そんな価値観は信ずるが、親である家庭にもみられるように思う。



サビエルが命をかけて伝えた信仰は今、不要なのだろうか

# サビエル生誕五百年

## 巡礼の道

藤屋侃士  
(下松市幸ヶ丘)

322

信徒に配られた中田秀和が描いた  
二十六聖人の殉教の絵



二十六聖人の殉教の絵

便利な時代はない。  
そんな時代背景の中で、信仰の恵みとか、良心、道徳などが占める割合は小さくなっている。いじめによる子供の自殺や自分の利益のため簡単に人の命を奪う事件などが後をたたない。信仰の軽視と

関係がないだろうか。何か大切なところで道を間違えているよう思えてならない。

教皇ベネディクト十

六世が「信仰年」を宣言した。現在、信仰は深刻な危機にあるといふ。つまり、信仰が極めて厳しい状況下にあるのは日本だけではなく、今の世界的傾向な

どを觀ながら、彼らが命をかけて守った信仰と自分の信仰が同じ

「新たなかいのち」への希望」という仰々しいタイトルで書くのはこれで終わるが、書き始めた時よりも何か思ひ始めていた時よりも何か思ひ始める。それに、命をかけて守った信仰と自分の信仰が同じ「新たなかいのち」への希望」という仰々しいタイトルで書くの

のだろう。それに適切な対応策が打ち出されていないので事実だ。二十六聖人列聖百五十年記念の殉教者のカーデを觀ながら、彼らが命をかけて守った信仰と自分の信仰が同じ「新たなかいのち」への希望」という仰々しいタイトルで書くの